参考資料１

第３回滋賀県基本構想審議会（5/29）における主な意見

■ 基本構想の構成（主にリスクの位置付け）

○　2030 年滋賀のリスクとあるが、記載されているのは滋賀というより日本のリスクではないか。次期基本構想は、滋賀が他県に勝つためのものではなく、むしろ日本のモデルとして滋賀が他県を引っ張っていくものとしてはどうか。

○　滋賀のリスクを捉えた課題対応型ではなく、滋賀の強みをより強く打ち出す方が、県民にとって希望の湧く計画になるのではないか。滋賀らしさももう少し出すべきではないか。

○　基本構想で、「何を目指すのか」に重点を置くのであれば、基本構想の組み立てとしては、まず「目指す 2030 年の姿」があり、その次に現状や特徴を踏まえて、「政策の基本的な方向性」を打ち出すべきではないか。その際、滋賀のリスクを書くことにどれだけの意味があるのかは疑問。

○　強みを活かしたり、目指すものを実現するためにそれを妨げるものがあるのならば、リスクとして書くべき。

■ 2030 年の展望

＜滋賀のリスク＞

○　一番のリスクは、行政や介護、医療もそうだが、それらに対して県民が依存していること。住民と専門家や行政との関係性は、これまでの行政が何でもやるといった方針から、大きく見直していかなければいけない。

○　滋賀県民は、自分たちが恵まれていることに気づいていない。そうしたことに気が付かないこともリスクではないか。

○　滋賀における交通の地理的優位性について、幹線系の交通はいいが、地域公共交通の衰退についてはリスクとしてあげるべきではないか。

○　ＩＣＴ、ＡＩ等については、毎年、進化が激しく、少し乗り遅れたら追いつけない可能性もある。県民や企業にとってリスクとならないようにしなければいけない。

■ 基本理念と目指す2030年の姿

＜基本理念＞

○　基本理念の中身はこれでいいと思うが、県民それぞれが関わる姿勢、基本構想を動かす信念を明確に。特に、地域の住民や地域の力が引き出せるよう表現を工夫すべき。

○　「一隅を照らす」という言葉があるが、住民一人一人が意識をもって、それぞれの立場で行政と一緒にがんばるといったことが大事。こうしたことが全体の豊かさにつながるのではないか。

○　ブータンでは、自分だけの幸せということは存在せず、周りの人みんなが幸せと感じられて自分も幸せと感じる感受性がある。個が重んじられる風潮もあるが、それだけではなくて横のつながりを尊重できるバランスが求められるのではないか。

○　この理念では、「わかちあう」といったことが新しく出てきているのだが、幸せとはあまりマッチしないように感じる。個の幸せではなく、共に生きる、共生社会をつくるところに焦点を充てた施策づくりになるのではないか。

○　健康で、柔軟な生き方を選択できることが、幸せとすると、健康でない人は幸せではないのかとなる。「人生 100 年時代滋賀で『共に』生きる」として、そうした視点で施策を考えてはどうか。

＜目指す姿＞

○　変化の時代に、漠然と不安を抱えている中にあって、希望に満ちると言われると、かけ離れたことのように感じる。たくましく柔軟に生きるといったことは、目指す姿として捉えやすい。

○　「未来への希望に満ちた」といった言葉は、しんどいと思う人がいる。「自分らしさ」や「その人らしさ」、「あなたらしい生き方」など、やわらかく、やさしい言葉の方が、伝わりやすく、しんどい人も減るのではないか。

○　目指す2030年の姿に全て、「未来」とあり、そのために、今の自分たちがあるのかと思うと少ししんどく感じる。また、環境が基本なのはわかるが、経済、社会など相互に関係し、循環しているものだと思う。

○　目指す姿では、環境（琵琶湖）が土台となっているが、今の琵琶湖の環境は本当にひどい状況。環境が滋賀の土台として成り立つのか。

＜その他＞

○　基本理念やキャッチコピーは、一般的には小学5年生がわかるようにするのがよいと言われている。例えば、「健やかな生き方」ではなく、「からだも、こころも健康に生きる」だと小学5年生でもわかる。

■　政策の基本的な方向性

＜未来への希望に満ちた健やかな生き方：健康、柔軟なライフコース＞

○　こころの健康は、一言でいえばストレスのない生き方。社会参加、生きがい就労など、生涯現役の推進、一人ひとりがいくつになっても何らかの役割を持って、社会と関わっていくことが、こころの健康につながり、活力ある社会を生み出していく。

○　生涯を通じた学ぶ機会の提供のところは、職能だけではなく、地域課題や社会的課題を自らの問題として共に解決に向かうための学びの機会が抜けているのではないか。

○　「学ぶ力」を高めるのではなく、「学ぶ意欲」を高めるべきだと考える。学力向上ではなく、学ぶ楽しさを教えてほしい。

○　柔軟に生きるための学校教育とあるが、大人にもあるとよい。

○　だれもが複数の役割を持てる社会づくりは、少し表現を注意した方がよい。発達障害者の方など、同時に複数のことをこなすことが苦手な方もおられる。

○　市町では、運動習慣づくりのため、様々な仕掛けをし、住民は楽しんでやっている。滋賀で運動やスポーツを楽しむとしたほうが、みんなに入ってきやすいのではないか。

＜産業、社会基盤、その他＞

○　立命館大学には、理系の学生が 9600 名いるが、ほとんどが県外から来ている。滋賀での理系人材育成、定着が大事ではないか。

○　社会基盤のところにも、地域の担い手、人づくりの視点を位置付けるべき。

○　滋賀には文化、芸術いろいろあるが、あまりここには出てきていない。

○　食べる、生きるといったことと農業は切っても切れない関係。農業従事者は、非従事者に比べ、一人当たり医療費が 7 割というデータもある。医療、福祉、教育などのあらゆる面から一次産業を進められるとよい。

○　外国人就労者は増えており、そのことにも触れるべきではないか。